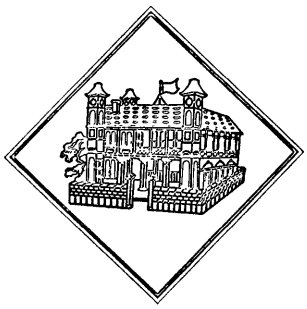
●読書案内

アーバンデザイン関係の文献



アーバンデザインという一般の人には耳なれない言葉は，日本語でいえば，都市デザイン又は都市設計のことである。戦後わが国の都市計画は戦災復興のため，道路・橋・河川改修などの土木事業に追いまくられてきた。それが「もはや戦後ではない」1960年代のはじめに，アーバンデザインがジャーナリズムに登場した。加納プランといわれる東京湾埋立計画，菊竹清訓による海上塔状都市案，丹下健三研究室による「東京計画1960」(『新建築』1961.3) などいずれも壮大なプロジェクトであった。この経緯は磯村英一編「現代都市問題」（有斐閣，1962）に都市デザインと都市計画という節をもうけて10頁ほどふれている。この本の要約によれば，「新しい世代の建築家たちが都市デザイン論を提出するようになったが，そのときには，いわゆる建築家都市計画家（アーキテクトプランナー）と称せられるグループは，もはや完全に都市計画のアウトサイダーと化していたのが実情であった。」のだが。なおこのうち丹下プランについては，丹下健三「日本列島の将来像」(講談社現代新書，1966) がふれている。

かくて高度成長の出発点である60年代のはじめに日本のアーバンデザイン構想が登場したわけだがこの頃ジャーナリズム論壇でもっとも活躍したのは**黒川紀章**であろう。丹下健三研究室の出である彼の論文には，「アーバン・デザインの方法」(『国際建築』1960・4)「アーバンデザインの技術」(『近代建築』1961・1～3)，「農村都市計画」(『近代建築』1960・4)，「都市の核と公共建築—求心核と遠心核」(『公共建築』1961・11)，「都市の立体化」(『建築』1963・11)，その他があり，この集大成として小著であるが，「都市デザイン」（紀伊国屋新書）が1965年に刊行された。黒川にはその後，「行動建築論」（彰国社，1967)，「生きがいの未来学」(白馬出版，1972)，「メタボリズムの発展」（白馬出版，1972）の著書がある。

〔1〕**古典**　都市科学の古典に**ルイス・マンフォード**の著作をあげることには何人も異存がないであろう。建築や都市計画の専門家ではなく，文明批評家—ゼネラリストとして，都市計画における人間的要素を重視する点に彼の特色がみられるが，1922年に「ユートピアの系譜」を刊行して以来，50年にわたる著作活動をつづけておりわが国でもすでに戦時下に「技術と文明」が飜訳され，世に知られていた。戦後は主として生田勉らの努力によって数多い飜訳書が出されてきた。（文明批評家としてのマンフォードについては本号の三木馨論文にくわしい。）マンフォードの著作中アーバンデザインに関係するものとしては次の訳書がある。

「歴史の都市・明日の都市」（新潮社，1969）

「技術と文明」（美術出版社，19

72)

「都市と人間」(思索社，1972)

「多層空間都市」(ぺりかん社，1970)

「現代都市の展望」(鹿島出版会 1973)

〔2〕**環境論**　ここでは総論として環境のほか景観・開発計画・構造などもろもろのテーマを含んだ文献を取りあげる。

まずわが国における首都圏計画の規範となったイギリスの大ロンドン計画については，ロンドン市が1959年自らニュータウンとして計画した人口10万のハンプシア州フックに関する研究としてロンドン州議会編「新都市の計画」(鹿島出版会，1964)がある。フック計画の特色は都市の中心部に人口の3分の2を収容する高層住宅による内部市街地を計画した点で，これにより6万人が中心地区より10分以内のところに住むことが可能になる。わが国のように開発されればされるほど中心部が事務所で占められて，人間の住むところがだんだん遠くなるといった計画でないことが注意されよう。いずれにせよ，こうした計画では建築物への投資がたかい比率を占めるわけで，単なる量の拡大ではなく質への転換が問われるようになり都市のひとつの区域を再開発する際にも総体としてのデザインが必要になってくる。こうしたテーマを扱った文献としては，歴史的な概観を行なったものに，

ベイコン「都市のデザイン」(鹿島出版会，1968)

があり，アメリカを対象としたものに

Urban Design Manhattan (1969)

ターナード「国土と都市の造形」(鹿島出版会，1966)

また，フィンランドについては

ヘルツェン「タピオラ田園都市—フィンランドのニュータウン建設」(鹿島出版会，1974)

がある。

その他都市デザイン論としては

Barnett "Urban Design as Public Policy" (1974)

都市デザイン研究会「現代の都市デザイン」(彰国社，1969)

栗田勇「都市とデザイン」(鹿島出版会，1971)

スプライレゲン「アーバンデザイン—町と都市の構成」(日本サムシング，1972)

クロスビー「建築・そのシティセンス」(美術出版社，1972)

リンチ「都市のイメージ」(岩波書店，1968)

エクボ「景観論」(鹿島出版会，1973)

環境を論じたものには，

正井泰夫「都市の環境」(三省堂，1971)

ムーア編「新しい建築・都市環境デザインの方法」(鹿島出版会)

ルビンシュタイン「環境計画と設計」(誠文堂新光社，1974)

イーウオルド編「人間環境の未来像」(鹿島出版会，1968)

ハルプリン「都市環境の演出」(彰国社，1970)

パーロフ編「人間環境都市」(鹿島出版会，1971)

アンダーソン編「未来環境の創造」(鹿島出版会，1973)

菊竹清訓「海上都市」(鹿島出版会，1973)

などがある。

〔3〕**空間論**　哲学者による空間論には，

ルフェーブル「都市政策の構想」(岩波講座「現代都市政策」別巻，1973)

があり，同じく岩波講座では1巻をさいて「都市の空間」(第9巻 1973)にあてているが，本編のデザイン論とはあまり関係がない。むしろ建築家による次の論集の方が読みごたえがある。

西山卯三「著作集3　地域空間論」(勁草書房，1968)，磯崎新「空間へ」(美術出版社，1971)

また京都大学の**上田篤**を中心としたグループによる活動がめざましいが，

上田篤「生活空間の未来像」(紀伊国屋新書，1969)

上田篤，外「フィールドノート都市の生活空間」(日本放送出版協会，1970)

上田篤「人間の土地—生活空間のモノグラフ」(鹿島出版会，1974)

のほか，岩波新書として刊行された「日本人とすまい」(1974)はきわめて小冊子ではあるが，梅棹グループとの交流から触発された

ためか，ユニークな発想がちりばめられており，まさに小さくて大きな本といえる好著である。

その他都市空間を論じたものに

ギーディオン「空間・時間・建築」（丸善，1955）

都市デザイン研究体「日本の都市空間」（彰国社，1968）

ウインゴ「都市と空間」（鹿島版会，1969）

井上充夫「日本建築の空間」（鹿島出版会，1969）

岡本幹雄「生活空間」（三一書房，1971）

ソマー「人間の空間—デザインの行動的研究」（鹿島出版会，1972）

西原清之「空間のシステムデザイン」（彰国社，1973）

宮沢弘「都市からの出発」（読売新聞社，1973）

ルドフスキー「人間のための街路」（鹿島出版会，1973）

京大西山研究室編「現代の生活空間像」（勁草書房，1974）

フルーイン「歩行者の空間—理論とデザイン」（鹿島出版会，1974）

などがあり，レクリエーション・スペースを論じたものには，

ベンソン「遊び場のデザイン」（鹿島出版会，1974）

ベンソン「新しい遊び場」（鹿島出版会，1974）

ハートウッド卿夫人「都市の遊び場」（鹿島研究会，1973）

があるが，いずれも子供の遊び場をテーマにしている。

〔4〕**保存論**　さらに空間論の一部として景観の保存が問題になる日本についていえば，とくに70年代以降江戸時代・明治時代の景観保存が住民の側から提起されてきた。周知のように，血縁による家族共同体から地縁による村落共同体へ発展することによって，先駆的に近江の村々に惣の自治組織が生まれ，ついで寺内町・在郷町にも住民の自治団体が形成されたがいま問題になっている近江八幡市の堀割などもこうした町づくりの一環としてつくられたものであり保存計画自体，単に昔の景観をとどめるだけでなく，住民自治の伝統継承といった面を含んでいることに注意すべきであろう。

町が車や工場や事務所のためにあるのでなく，そこに住民が生活するために存在するといった原点にたって，保存計画がたたかわれているのが現状である。長崎の中島川を守る運動，小樽市運河・倉庫群を守る運動などさまざまな保存運動については，これまで雑誌『都市住宅』で個々に紹介されたが，総括としては**長谷川堯**の連載論文「ルポルタージュ：歴史的空間の現在」（『新建築』1975・1より連載中）がくわしい。『都市住宅』は1974年には保存の経済学を年間テーマとして，丸の内・熊本・隅田川・阪神間・明治村・倉敷・京の川・町なみをとりあげ，つづいて1975年には町づくりの手法として2月号に「川越—保存から計画へ」を特集した。

なお都市形成の歴史的な経緯を知るには，2次資料によったものではあるが，

矢崎武夫「日本都市の発展過程」（弘文堂，1962）

西川幸治「日本都市史研究」（日本放送出版協会，1972）

玉置豊次郎「日本都市成立史」（理工学社，1974）

がまとまっていて便利であり，1次資料については最近「日本都市生活史料集成」（学習研究社1975）の刊行がはじまった。

第1—2巻三都篇，第3—5巻城下町篇，第6—7巻港町篇，第8巻宿場町篇，第9巻門前町篇，第10巻在郷町篇という構成だが，森山孝盛日記（大坂），才谷屋記録（高知），編年雑記（広島），上肴町記録（秋田），卜半家記録（貝塚），池井蛙口記（近江八幡），その他町方の記録を集成することになっている。

また，保存について論じた文献には

上田篤，外「都市の開発と保存」（鹿島出版会，1973）

西川幸治「都市の思想—保存修景への指標」（日本放送出版協会，1974）

〔大阪〕中之島をまもる会編「中之島　よみがえれわが都市」（ナンバー出版，1974）

三多摩問題調査研究会「水辺の空間を市民の手に」（編者，1974）

をあげておこう。〈青木〉